

う歩いたか分からぬまま、やっとの  
思いで守口まで来た。シトシトと降  
り続ける雨、真夏の厚さ、家々が燃  
える炎の中、例えようなない焼け焦  
げた臭いに耐えながら、半ベソをか  
きつつ守口の我が家にたどり着い  
た。

幸い私たちの家は無事だったが、  
近くに一トン爆弾が落ちて大きな洞  
穴になっていった。そばに住んでいた  
友人は直撃で亡くなった。あたら若  
い命を散らしてしまった人たち。運  
よく、私は今日まで無事生き延び、  
よかったと感謝している。

毎日、学徒動員に励んだとして、  
全校生徒のうち三人が表彰され、そ  
のひとりに選ばれた。ほとんどの友  
達は、戦争が激しくなるにつれ、恐  
れて工場には出て来なかったのだ。  
当時、父はビルマで戦っていた。机

の引き出しの底にそっと眠っている  
表彰状を見ると、「我れながら、よ  
くもあれだけやれたナ」いやが上にも  
当時のことを思い出す。

今ごろの若者は、つまらぬことで  
自殺したり、人を傷つけたり、戦時  
中はだれもが生きることだけに必死  
で自らの命を絶つようなことはしな  
かった。平和になり、すべての物が  
手に入る現在、私と同年配で戦争を  
見てきた人たちでさえ戦争の苦しみ  
を忘れ、日の丸を立てるな、君が代  
を歌うな、と日本国民であることの  
誇りを持っていない人も大勢いる。  
だれも好きで戦争をしたわけではな  
いのだ。

広島、長崎では、何十万人もの  
人々が苦しみながら死んでいった。  
お寺の境内で井桁（いげた）状に組  
んだ黒い異物があつた。それは、全

裸の焼死体を積んでいたのだ。思わ  
ず目を背けたくなる光景。市電は、  
骨組みだけになってたたずんでい  
た。戦争は、どんな時代にも多くの  
犠牲者を出し、人の心まですさみ切  
ってしまう。

私は、当時のことを一つ一つ思い  
出しながらペンを取っている。絶対  
に戦争をしてはならない。この世の  
地獄を見てはならないと思う。

戦争で亡くなられた多くの人のご  
冥福を心からお祈りする。